

✿ 退職者のひとこと

定年を迎えるに当たって

1976年入所以来、平城宮跡発掘調査部で19年、飛鳥藤原宮跡発掘調査部で合せて6年、埋蔵文化財センターで6年、合計31年間、他機関への転職もなくずっと奈文研でお世話になりました。

幸運なことに良き上司、同僚、後輩に恵まれ、楽しく過ごさせて頂いた年月でした。ここに紙面をお借りして衷心より感謝の意を表したいと思います。

この間、多くの方々から貴重な御指導を頂きましたが、中でも印象深く忘れ難い、その後の人生を導いた叱咤激励をここに披露します。

5代前の所長坪井清足さんは、今は好々爺で優しく接して貰っていますが、私達が入所した当時の坪井さんは、「悪足（あくたれ）」と綽名され、と言うよりも本人もそれを自認甘受していましたが、遠慮容赦なく、ものを申す人でした。ある時、多分、酒席の場で、見聞を広めようとしないう我々若い連中を咎めて、「奈文研に入ったからといって研究者面するな。お前らは^{かえ}孵るかどうか分からない卵じゃ。受精卵かどうか分からない。」確かこんな風な前言の後、優しく井の中の蛙になるな、客観的な判断ができるように見聞・素養を高めよと説教して頂きました。ともかくも、受精卵で雛には孵ったと自負していますが、果たして親鳥になれたかどうかは甚だ疑問です。残りの人生も親鳥への途を目指して生きて行こうと思っています。

我々が入所した時代は、研究所の絶頂期でありま

したが、その後、定員削減、行財政改革、国家公務員制度改革のあおりをまともに被り、組織も改変されました。私たちの世代は、奈良国立文化財研究所の時代、東文研と統合した独立行政法人文化財研究所の時代、国立博物館と統合した独立行政法人国立文化財機構の時代を経験してきました。人から度々「行政法人になってどうですか。どの時代が良かったですか。」と尋ねられることがあります。私自身、同じ立場で3つの時代を経験してきたわけでないので、答えに窮しますが、当初の独立行政法人の謳い文句と違い、国立時代より一層締め付けが厳しくなり、融通性がなくなりましたと答えています。でも、良いこともありました。東文研と一緒にプロジェクトを組み仕事を進め行く間に、多くの方々と知己になり、新しい刺激を受け、発想も豊かになりました。国立博物館と統合してからまだ日が浅く、館員の方とほとんど交流できず残念に思っています。最後に一言。奈文研永遠なれ。（副所長 巽 淳一郎）

退職挨拶

考古学や埋蔵文化財保護に携わる職務に35年間就いて定年を迎えた。大学の考古学研究室の助手、宮城県立東北歴史資料館の考古研究科、文化庁で埋蔵文化財担当の調査官、奈文研の部長職を勤めてきた。子供のころ、郷里の裏山で土器や石器を拾っていた私が、職業として考古学研究や遺跡の保護行政に専心してこられたのは、大変に幸せであった。

捏造された遺跡で30年近くも騙されてしまい、多くの方々に大変なご迷惑を掛けてしまったが、日本



左から、高瀬文化遺産部長、巽副所長、岡村企画調整部長、光谷年代学研究室長、安田埋蔵文化財センター長

列島人の起源、縄文時代の貝塚などの研究に直接携われ、ロシア沿海州の貝塚発掘や中国内モンゴルの初期新石器時代遺跡の発掘調査にも参加できた。文化庁に移ってからは、多くの遺跡の保存や保護行政のシステムや標準作成、『発掘された日本列島展』、「阪神淡路大震災に伴う復興・復旧事業に伴う発掘調査」支援などを、手がけることができた。研究的には主に縄文時代の遺跡や文化を総合的に捉えて復元し、成果を広く普及し、文化財についての理解を深めるなどのパブリック化に努めてきた。このような仕事の延長で、文化財保護に資するために平成14年から奈文研にお世話になることができた。

奈文研では、『曙光の時代 一日本考古学の連続と変革』展をドイツで開催し、奈良博で帰国展もおこなえた。キトラ・高松塚古墳の保護などについて文化庁や自治体、マスコミなどとの対外的な調整、所内の連絡調整をおこない、自己点検委員会の担当ともなった。また平城宮跡については、最も不案内な私が、平城宮跡発掘調査部長となり、大極殿の復原研究の連絡調整も担当させていただいた。どの職務についても十分な役を果たすことができず、申し訳なく、心残りである。

日本の考古学、埋蔵文化財など保護行政上での研究的リーダーとして活躍し、私が研究を志した時から憧れであった奈文研で、曲がりなりにも6年間仕事させていただいた。その間大変勉強になったし、純粋な研究もすることができた。ありがとうございました。今後とも奈文研が、日本の文化財研究のリーダーとして、国際的にもますます活躍されることを期待したい。(企画調整部長 岡村 道雄)

趣味と実益を兼ねて結構ですなあ

“趣味と実益を兼ねて結構でんなあ！”発掘調査が仕事だと言うと、人から言われることがあった。そんな時は“仕事となると苦勞も多く大変ですよ”と答えていた。これで給料をもらっている身としてはまさか“楽しいですよ！”とは言えない。本当のことを言うと、発掘調査は肉体的にはシンドイ面はあるが、精神的には楽しい仕事でした。

初めて発掘調査を経験した平城ニュータウン予定地における奈良山瓦窯の分布調査、当時の奈文研では遺物として取り扱わなかった近世の赤膚焼のカケラを嬉々として拾い集めた平城宮内の現状変更現場、

保存状態の良さに感激した薬師寺西僧坊跡、初めて担当した平城宮中央区朝堂院東第一堂地区、一人で現場を担当していきなり墨痕鮮やかな木簡に出くわしあせった御前池の現場、などなど走馬燈のようによみがえってきます。

発掘調査をおこなうかたわら、平城宮跡発掘調査部計測修景調査室の一員であった私は平城宮跡をはじめとする遺跡の整備計画立案作業、庭園の実測調査、写真測量などに従事しました。

遺跡の整備計画はものを作る作業です。自分の頭の中でイメージした姿が現実の形となって表れるのですからこんな楽しいことがあるのでしょうか。平城宮跡で私が初めて実施設計に近い図面を描いたのは佐伯門を入ったところにある予備駐車場です。テニスコートとしても使える設計でした。これなどはなんの変哲もない舗装された広場ですが、でも作る喜びはありました。覆屋の西側に作った案内広場も苦勞した思い出です。頭塔の復原整備も発掘調査と併せて心に刻まれています。

庭園の実測では東大寺知足院、長崎県五島の石田城庭園、滋賀県の庭園群などが強い印象に残っています。庭園の実測は落葉樹が葉を落とした冬から春先が見通しよく、この時期におこなうのが常道です。しかし、この時期はまた花粉症の季節でもありました。庭園はいわば花粉の巣窟ですから、ひどい花粉症の私は鼻水を垂らし泣きながら(?)実測したものです。

写真測量では桂離宮書院、平泉観自在王院や沖縄識名園などの庭園石組、薬師寺の薬師三尊像、春日大社の鼈太鼓、奈良井宿などの伝建地区町並、沖縄座喜味城石垣などを実測しながら長い時間をかけて間近に見るという貴重な経験もしました。

奈文研へ来て35年が経ちました。生来粗忽な私は失敗もあり、先輩や同僚に助けられたこともありました。皆様に篤く御礼申し上げます。

(文化遺産部長 高瀬 要一)

